



## 作品に命を吹き込む

### 第9回藤田佳代作品展

2006年11月18日 兵庫県芸術文化センター中ホール  
「追いかける」「花」「震える木」

着実に個性的な創作活動を続けている藤田佳代舞踊研究所。今回は第9回の藤田佳代作品展を開いた。彼女の志向するダンスは、伝統的なモダンでも、今流行のコンテンポラリーでもない。作品主題を具体化するにあたって、日本的といえる静中の動、あるいは寡黙の中の雄弁といった感覚の手法と動きで独自の世界を展開する。今回の三作も、技術을ひけらかすのではなく、声高に叫ぶのではなくしきりに言いたいことはしっかり表現する、という姿勢に貫かれている。

最初の二作は再演。まず「追いかける」。舞台奥の紗幕の向こう側を左右に移動するダンサーたちの前を黒衣の藤田が主として背を向けながら前後する。寺井美津子、金沢景子、かじのり子らの群舞は三グループに分かれ、順に彼女を囲んで動く。チェロの物憂げな、しかしなにかを訴えるような音、これらが一見無関係のように演じられ、奏でられるが、それらの間に徐々に緊張が生まれ、センターの彼女の焦燥が高まり、開放される。「花」はチェロとピアノ、白いドレスのダンサーたちによって序にはじまりヒマワリ、コスモスなど五つの花が表現される。大輪のツバキの金沢景子のソロ以外は群舞、これも藤田の特徴だがほとんどがユニゾンでシンメトリック。しかし、その動きと隊形は円と線に微妙に変化し、花に寄せた心の襲を描き出す。

新作「震える木」は安永和絵の詩に触発された作品。丹生ナオミの作曲、チェロ、ピアノにオーボエの演奏、具象的に、象徴的にと変化する映像、それに藤田に入れ替わる存在として足を踏み指を鳴らすフラメンコの東仲一矩が加わるという、彼女としては饒舌な手法を使う。しかし、樹木を人に模し、藤田とそれを取り巻く生態系を示す群舞、そして深く優しい音によって創造される空間はまさに彼女のもの。多くの要素を使いながら、侵蝕される自然の悲しみを深く静かに訴えていた。

うらまこと 『週刊 オン ステージ新聞』2006年12月15日号より

リサイタルを拝見したのは、今回でまだ2回目ですが色々な楽しみ方を覚えモダンバレエの奥深さに感じました。激しい動き、静かな動き、全体の動き、個人の動き、舞台全体が楽しめました。今回は、生演奏にフラメンコ、音楽と影が印象的で不思議な空間に魅了されました。ずっと同じ踊りを見続けたい気持ちと違う踊りを早く見たい気持ちで複雑な感情のまま終演までがあったという間でした。はやく次の舞台が来るのを心待ちにしています。

砥石和久

藤田佳代舞踊研究所のダンサー総出演による「第9回藤田佳代作品展」では、3つの作品「追いかける」、「花」、「震える木」が発表されたが、ここでは、その3作品について、私なりの批評を述べたいと思う。...というのは冗談で、私にそんな批評ができるはずがなく、あえて意見を述べるとすれば、照明（「追いかける」では佳代先生の影が巨人のようになっていて「迫られている」という迫力を感じた等）やスクリーン映像（千永先生が一時出演されていたそうですが判りませんでした）が素晴らしいこと、生演奏と踊りを合わせるの是非常に難しいのだと言えるくらいです。

今回、私の妻（石井麻子）がリサイタルに出演させていただきました。妻は何と第1回のリサイタルから出演（すべてのリサイタルに出演したわけではないですが）しているらしく、久々の出演に張り切っていました。リサイタルに出演された方、特に先生方本当にお疲れさまでした。

リサイタルが無事に終わり、先生たちはホッとされていることと思いますが、同じくホッとしているのがこの私です。本番はわずか2時間程度ですが、それに向けての練習は夏頃から毎週のようにあり、日曜日にも練習をしていました。妻は周囲に私のことを「子供の面倒をよく見てくれる人」と風評し、自分が練習に行きやすい環境を作り、そそくさと練習に出かけるのです。日曜日の度には私は2人の娘を連れて、他人から見ると、まるで奥さんに逃げられた夫とその子供であるかのように3人で Seer へ買い物に行ったり、それだけでは飽きて、3人で私の友達の家遊びに行ったり、3人でわざわざ三田にある公園に遊びに行ったこともありました。でもリサイタルを観たら、3人で出かけたこともいい思い出になりました。今から10回目のリサイタルを楽しみにしています。

菊原敬

一つの作品が本番舞台で、大きな命を得る。それは、「成功したね！ということとは別の話で、必ずしも成功したすべての作品が「命を得る」ことができたわけではありません。それはいろいろ要素の上に成立しているといえます。今回の新作「震える木」では、リハーサル現場から本番舞台まで一貫して観る立場に立てました。そのおかげで、「同じものを見つめる」という要素がいかに大きな力をもち、作品に命を吹き込むかを目の当たりにすることができました。

うまく言えないのですが、振り付けを終えて、産声を上げたばかりの作品「震える木」には、すでにその作品自身が見つめているものがありました。作者の手から放たれて、作品自身が独自に持った眼差しの行方がありました。作品はどこへ向かっていこうとしているのか、作品の見つめるものと同じものを見ようとして、作者、ダンサー、作曲者、演奏者、映像作者、スタッフは、本番までさまざまな思考を重ねたことと思います。本番舞台では、全員の眼差しの方向がびたりと「震える木」が見つめる方向と重なり、舞台上で展開されている風景だけではなく、もう一つの風景がクリアに見えたように思いました。つまり、「震える木」が見つめている風景が舞台上に現れたように私には思われたのです。初めての不思議な体験でした。眼差しの到達範囲は人それぞれであったとは思いますが、全員が同じ方向を探り当てたからだと思います。一番遠くを見つめる「震える木」の眼差し。その眼差しの行方を追ひ、「同じものを見る」ことで本番舞台での「震える木」は大きな命を得ることができたのでした。

菊本千永

## 作舞する

### ダンスブーケ2006

2006年8月27日(日) 本部スタジオ

「ハスミ in summer」藤田佳代 「雪」 田村優季 「水とパピルス」 平岡愛理&山下真奈 「花が咲く」 松本佳那子 「ひかり」 植岡マリナ 「雨の日」 川口桃子 「朝」 名田麻希子 「行方」 仲間み子 「夕立」 長谷川千夏 「風」 中村祥徳 「まわるたま」 金沢景子 「そのむこうへ」 寺井美津子 「月は夜の海であらぶ」 向井華奈子 「keep out」 かじのり子 「GIFT」 菊本千永 「雲の果てへ」 鎌倉亜矢子

ダンスブーケを観たのはこれで3回目です。見終わって、一つひとつの作品のよしあしのことよりも、おや今までとは少し違う、という感じが残りました。何が違うのかというと、一言でいうとみんな「作品」になっている、とでもいのでしょうか。特に中学生・高校生・大学生の作品がそれぞれ今までよりも完成度が高くなっているような気がしました。完成度といっても、私が完成度合いを批評できるわけではないのですが、少し言い方を工夫すれば、藤田佳代舞踊研究所の作風に近い、というか藤田佳代先生の作風に近いカタチで一曲一曲にまとまりがあった、ということです。もう少しだけ評論家的な言い方が許されるならば、「ダンスになっている」ということでしょうか。今まで観てきた印象は、創りなさいと言われたからいるんなポーズをつないで何とかひとつの曲の中におさめてきました。という感じでした。一方、今回はそれぞれについて一曲の全体像が見えてくるような印象を受けました。私の鑑識眼が向上したのかな。いえ、そうではないのでしょうか。今年は兵庫国体の出演、発表会、佳代先生リサイタルと稽古には相当なエネルギーを費やしてきたと聞いています。特にリサイタルには中学生・高校生もたくさん出演していました。今までの「発表会」とは少し次元の違う「大人の舞台」を経験して、それぞれの経験に応じてダンス観が確立された、その結果としてダンスを創るとき意識にも影響が及ぼされた、と理解する方が自然なのかと思いますが、きつとこんなところで立証されたのではないのでしょうか。モダンダンスを踊っていれば、モダンダンスが創れるようになる。これぞ右脳の開花なしにはできない芸当です。モダンダンスを創ることがわかってくると幅が広がって踊りのレベルも飛躍的に向上する。クラシックバレエとの根本的な違いはここにあるのでは...

だんだん感想から妄想になってきました。次回のダンスブーケでは、この「モダンダンス = 右脳 = 創作理論が実証され、研究所の次のキャッチフレーズに採用されることを期待しています。

岡村和彦

## 舞台を創る

### 創作実験劇場

2007年3月11日(日) 兵庫県芸術文化センター小ホール

創作って何？ 踊りをつくるってなに？ そもそも踊りって何？ 考えたらキリがありません。

今回 'アウシュヴィッツ鎮魂'というCDを手に入れました。そのうちの一曲ヴィクトル・ウルマン「ピアノソナタ第7番」が「開く」にピッタリ。

ヴィクトル・ウルマンはこの曲を8月22日に創り10月18日にアウシュヴィッツで亡くなっています。暗い音楽だろうと思われるでしょうが、すっきり明るい力強い音楽でいきなり踊りを創りあげました。すごい人を知ることが出来ました。  
藤田佳代「開く」「ハズミ in summer」「黒と白のエチュード」

今回で何作目になるのでしょうか。今度こそいい作品が出来るぞーと思って取りかかり、頭の中ではどうに出来ているはずの傑作を、いざ振付を考え、みんなに踊ってもらい、ディスカッションし、形にしていくうちに、あれー？ 踊って下さる方、見て下さる方にいろいろアドバイスをいただきながら、なんとかかんとかが形にさせていただいているという現状を未だに抜けきれず、今回もまた…。頑張っています。  
寺井美津子「そのむこうへ」

藤田佳代舞踊研究所の門を叩いてそろそろ丸5年になる。創作実験劇場に作品を出してきたがその度に周囲からは「これって踊り？」とか「これはマイムだ！」とか「藤田の踊り？」などと言われる。それでも私がここに居る理由は何か…。佳代先生は怒ると思うが私は先生と似ている…と思っているのだ。先生の作品は一見抽象的だが、振付の時は具体的なものを見、感じるように言われる。どこまでそれを理解しリアルにイメージできるか、とても難しいとどががつきつめる作業は面白い。私は自分の作品をつくるとき、この作業を繰り返す。だが踊り方や表現の形が違つて「これが踊り？」となるのだ。一体なに？ 踊りって、モダンって？ 先生と同じつもりでも結局私自身の表現に至っていないということか。そう、そうなのである。…佳代先生が動くとき確かにそこに「何か」が生まれる。私はどうしても先生に見る「何か」を見たい。それが見えたとき私の踊りは変化するかも知れない。だから先生のそれを見るまで、私はここに居るのだ。  
鎌倉亜矢子「スパイラルな夜」

小事件！ あわや骨折 ダンサーって運動神経がいいですよ、と言われることがあります。確かに学校の体育は楽しみで得意な科目だったように記憶しております。

が、それも大きな勘違いだったのではないかと思えることが…。先日、かじ作品 Keep outをリハーサル中、倒れ込みながら床をたいて跳び起きるという動きに失敗し、倒れこんだ拍子に体の下に手が入り込み自分で自分の中指に全体重をかけ、その途端 ほきっという音と共に痛みが…！ しかし、すぐにすくんと立ち上がり、走って中間の踊りの輪に入るつもりが現実…。さらに転がって起き上がれず、どんどん中間に抜かれ、おいてけぼりをくらひ、あーまってえーという心の叫びも虚しく、踊りの輪は遠くに行ってしまう、ひとりぼっちになりました。それを見ていたちえちゃん(菊本さん)曰く、「ヨロヨロとみんなの輪にはいる姿が笑えた！」と。幸い指に異常はありませんでしたが、自分が心身共にかなりどんくさいダンサーで、かつて体育の花形だと思っていたことは夢だったとようやく気が付いたところです。  
かじのり子「keep out」

先日、クラシックバレエを習っていた時の友人から突然の電話があり、20年ぶりに再会しました。彼女は3年前に離婚、ご両親も他界、5年生と1年生の娘さんを育てています。この度ニュージーランドの方と運命的な出会いをして再婚することになり、1月末に日本を離れます。再会送別会の席で2人の娘さんと初対面！ 2人とも彼女ゆずりで屈託がなく、人なつこくて、男の子みたいに元気で活発な子！ どこに行っても強く、たくましく、しなやかに育ってくると確信できる子供です。即、私も友達の一に加えてもらえ、プロフィール式のサイン帳を手渡されました。ペンを進めるうちに「[将来の夢]はという質問の前で、「なつかしい～！ 小学1年の時、作文に『バレエの先生か、毎日踊る人』なんて書いたわー！ 今まさに夢が叶ってるねん。でも、今からの将来？ う～ん。そうそう『きれいなおばあちゃん』と書いた私。『ん？ ちよっと待てよー、これは大変。そうなるためには私だけの問題じゃないやん！ まずは平和でなくちゃいけないし、地球の環境がよくなきゃならないしー、子供達が元気でいてくれなや！ ！う～ん。この夢を叶えるのはかなり難しいかもー？ ！いやいや、できることを精一杯しなやね！ またいつか再会したとき、『きれいなおばあちゃん』じゃなくて『笑むじわの多いおばあちゃん』になってても夢は叶ったことになってねー！ シルバークラスで楽しく踊ってれば2つの夢が叶ったことになるねー！」等などワイワイ、バクバク本当に楽しい送別会でした。別れ際に、子供たちからメッセージを送られたように思いました。踊りを通じてのたたくさんご縁に、心から感謝します！ ありがとう！  
金沢景子「まわるたま」

今年の冬はなんだかあたたかいですねー。これってやっぱり温暖化の影響なのでしょうかね？ 雪もめったに降らなくなりました。幼いころは雪合戦や雪だるまで楽しんでたのに…雪も降らなくなったし道端に花も咲かなくなったように思いませんか？ 以前は空き地や公園にもっと花が咲いていたように思うのに。

今回の創作実験劇場ではそんな実感をもとに踊りをつくっています。どんどん便利なものが増えて暮らしやすくなってはいるもののその犠牲になっているものもあるんだなあ。と、こんなことが心にちよっとひっかかって踊りを踊っています。

でも…現実はその犠牲に気づきながらもついつい便利な生活に慣れてしまっているのですね。かなしいです。

向井華奈子「ばらはだんだん咲かなくなった」

創作者として、はなはだ根本的な疑問、創りたいテーマが勝手に上がって作品ができるのか、作品がそもそも存在していて私を選んで創らせてくれるのか、実は私にはわかっていない。まず「言葉」がある。正確には言葉がどこからかやってくる。これはどういう意味？ 何を言いたいのか？ あ、こういうことを言いたいのかな、と言葉の意味が自分の「腑に落ちる」瞬間がある。この瞬間をひたすら待ち望む。これがこないと次には進めない。そして「腑に落ちたもの」を視覚化するのに一番ふさわしいと思われる構成を考える。ここまでがとても苦しい。ただ、この過程を無視してむりやり創っても私の場合全く作品にならないのだ。それから音楽を選び、振りを考える。作品の創り方は人それぞれであると思うが、私の場合、これで果たして作品を創っているのは私なのだろうか。私は生み出す創作者というよりは、例えばイタコのような媒体なのかもしれない。だけど、それでいいと思う。これからも、どうか私を選んで、「あなた」を形にさせてね。できればもう少し楽に…。  
菊本千永「GIFT」

今年もまたこの時期がやってきた…と思わないよう準備をしようと思っているうちに、あっという間に一年が過ぎ…。やっぱり年末から焦りだす自分に呆れ果てる。創作実験劇場といえば、私は毎回タイトルと衣裳がなかなか決まらず先生方に迷惑をかけっぱなしです。今回の曲は全曲で9分。踊りを作るのは5分が限界と思っている私にとって辛いこと(?)に、5分で一度音がきれる！ よし、この5分で作ろぞ！ と思い、なんとかようやく作った(作った気になってるだけでも…)のですが、先生方に見て頂いたところ、全曲の方が良いのではとのご意見を頂き、佳代先生にたたくさんたたくさん助けて頂いて、初めて9分という長いソロ作品となりました。今回の舞台の後、また次に向けて準備しておくぞ！！と思うだろうなあ…。でも作り続けることに意味があると思っているので、頑張ります！！  
灰谷留理子「流れ」

「内」が今回の出品作品名です

## お知らせ

兵庫県芸術文化協会創立40周年記念 パフォーマンス・フェスティバル

3月17日(土) 1時開演

兵庫県民小劇場 「花」「草木萌ゆ」

～小さなホールの飛翔～ モダンダンス & クラシックギター

3月21日(水・祝) 2時、5時開演(二回公演)

岸和田市立 自泉会館 「花」「黒と白のエチュード」「草木萌ゆ」

### 編集後記

8月や11月の舞台の感想を書け、なんて、無茶な！ ことをお願いしました。ごめんなさい。随分悩まれた方もおられたそうです。それでも書いてくださって本当にありがとうございます。また、創作実験劇場出品者も、みな犠牲者となりました。みなさんどうもありがとう。踊りの創り方は千差万別。ただ、ひとつ共通していることがあります。それは踊りを創っている間、ひたすら願っていることはみな同じ。どうか、この作品ができますように、これだけ、という点です。その代わりに、世界一の美貌や世界中の富や、世界がひれ伏す地位や名誉や、そんなものをあげるよと差し出されても、つかえすことでしよう(本当か?)。創作実験劇場はそんな出品者たちの願いに満ちた舞台なのです。今回紙面の都合上、出演者の名前を省略せざるを得ませんでした。作品展、実験劇場と若手ダンサーがしっかりと支えてくれています。成長がすごいので追いつけもつき、自分自身ももっと成長しなければ、と焦ると同時に、誠実なリハーサル態度にも心から感謝しています。見習います…と思う今日この頃です。  
責任編集 菊本千永